

災害遺構に学ぶ

Learning from Disaster Remains

特集担当主査：西岡 英俊

特集企画担当：浅野和香奈、岩城 一郎、岸部大蔵、瀬尾高宏、野口恭平、羽野 暁、平林由希子、山本浩之、渡邊弘子

写真1 奇跡の一本松と旧ユースホテル (撮影：山崎エリナ)

緑の星、地球に暮らす人類は、その豊かな自然の恩恵に預かる一方で、幾多の自然災害に見舞われてきた。現在のような各種インフラが整備される前は、中小規模の自然災害が各所で発生し、人々は人生のうち何度か被災するのが当たり前という自然災害と隣り合わせの生活であった。先人たちは、実際に大規模な自然災害に見舞われると、「子孫には同じ被害に遭ってほしくない」という生命体としての本能ともいえるべき気持ちから、鎮魂・慰霊の役割とともに、自然災害の記録を身近な石碑や

この自然災害から市民を守り、生活を豊かにすることは、土木の重要な役割である。わが国においては、死者・行方不明者数が10000人を超える被害が毎年のように生じるといふ戦後の荒廃した状況は土木技術の発展と各種インフラの整備により改善され、特に中小規模の自然災害に対する被害は、規模・頻度共に大きく減少した。しかしながら、阪神・淡路大震災や東日本大震災といった巨大地震による甚大な被害が発生

「まさか」は必ずやってくる

民俗的習慣として残してきた。人々はそれらを教訓として伝承するとともに、自身の被災経験も踏まえて、自然災害に対して物心両面で備えてきた。

ABSTRACT

Our ancestors scripted records of natural disasters on stone monuments. Today, we discuss whether or not to keep items that remind us of the painful experiences of large-scale natural disasters and agree to maintain them as various remains. Disaster remains have a role not only as a place of remembrance for the deceased but also to teach us lessons that can protect lives in the future. Disaster remains of schools provide a valuable learning opportunity for children. Civil engineers can enhance their disaster response capabilities by visiting the disaster remains to retrace the catastrophe. This special feature focuses on learning from these disaster remains. Hideo Tokuyama, who led the MLIT's recovery operations after the Great East Japan Earthquake, and Fumihiko Imamura, a researcher working with citizens on tsunami disaster prevention, discuss the importance of using disaster remains to teach the lessons of the disaster. Then, opinions and approaches from various perspectives are displayed as hints for how we should learn from the disaster remains. The editorial team hopes these articles will lead to the growth of our readers, who are to save as many lives as possible and contribute to the recovery and reconstruction after future disasters.

し、気象災害も激甚化の傾向にある。いわゆるハード的な対策だけでこれらの偶発的で大規模な自然災害の被害を完全に防ぐことは困難である。

高頻度に被害を受ける可能性は大きく減った現在、人生で大きな自然災害をまだ一度も経験していない人が

が増えた。土木技術者自身も、中規模の自然災害の対応を経験する機会が減っている。しかしながら、ある日突然に大規模な自然災害に襲われる可能性はまだ残されている。多くの市民にとって人生で初めて経験する自然災害は歴史に残る大災害となり、中堅・若手の土木技術者は災害対応の経験も不十分なまま突然に修羅場のような最前線に放り込まれ



写真2 石巻市震災遺構大川小学校を訪れる子どもたち

ることとなる。われわれはいつか必ずやってくる「まさか」の時に備えて、意識を高め、力を蓄えておかなければならない。

災害遺構の役割

このような大規模自然災害に対する意識を高める上で重要な役割を果たすのが、古くからある石碑などの伝承碑も含めた災害遺構である。近年の大規模自然災害では、過酷な経験を思い起こさせる物事を残すかどうか、残すとすればどのように残すか、多くの議論を経てさまざまな災害遺構が整備されている(写真1)。

災害遺構には、鎮魂・慰霊の場としての役割とともに、市民に教訓を伝承していくという役割がある。特に未来を担う子どもたちにとって、学校を生かした災害遺構は貴重な学びの機会となる(写真2)。また、土木技術者が被災状況を追体験することによって各自の災害対応能力を高める場としても、災害遺構は大きな役割を果たす。

このように災害遺構の役割は、普遍的なものであるが、それを活用し

ていくためには、その時代に応じた工夫と努力が欠かせない。本特集では、このような災害遺構を活用した学びに着目する。

本特集の構成

本特集の冒頭は、東日本大震災当時東北地方整備局長として最前線に立った徳山日出男氏と、津波防災に関する学術研究および市民協働の取り組みの第一人者である今村文彦氏による、災害遺構を用いた伝承の必要性についての記事である。

災害遺構を実際に活用した学びの場を提供する側の視点として、3. 11伝承ロードおよび阪神高速道路震災資料保管庫の取り組みについて紹介する。その他、石碑やモニUMENTなどの自然災害伝承碑をデータベース化する取り組みや水防演習に関する取り組みについても紹介する。

実際に災害遺構での土木技術者としての学びの経験として、編集委員あるいは若手・学生会員による災害遺構の取材も行った。その際、本誌表紙写真の撮影を担当している写真家の山崎エリナ氏にも同行いただ

き、写真家から見た被写体としての災害遺構の持つ力について紹介する。災害遺構の視察も含めたインフラツーリズムを実際に企画催行した旅行会社の意見も紹介する。

東日本大震災の被災地から教訓を伝えようとしている方々の取り組みとして、石巻市震災遺構大川小学校で語り部活動を行っている大川伝承の会共同代表の佐藤敏郎氏と、南三陸町で地元建設会社社長として災害対応に当たった高野剛氏にインタビューした。

人文科学系の研究者および報道関係者の意見も紹介する。土木分野以外からの災害遺構に対する意識や考え方を知ることが、われわれ土木技術者にとって、新たな気付きにつながる貴重な情報となるであろう。

編集後記では、「土木技術者としての災害遺構からの学び」について、本特集の担当委員で議論した内容を座談会形式で紹介する。

本特集が、読者である土木技術者の成長につながり、いつか来てしまうその日に、一人でも多くの市民の命を救い、その後の復興に貢献することを祈念する次第である。